河内版・ツバキの花

koyasatobito

　今日もまたおれんとこのオンドリがさんざん追っかけ回されよった。おれが昼飯を食うてから薪を取りに出かけるときやった。
山に登ろうとしたら背後でバタバタとニワトリの羽ばたく音が騒々しいやないけ。たまげて振り向いて見たら、思うたとおりや、あの二羽がまた喧嘩の真っ最中やないけ。
　チョムスニとこのオンドリ（どたまがおっきい、まるでアナグマみたいに頑丈そうな奴）が柄のちっこいおれんとこのオンドリをむさんこに攻め立てよる。それも、ただ攻めるだけやのうて、バタバタッとトサカをつついて引き下がったかと思うたら、しばらくしてから、バタバタッと首根っこをつつくやないけ。こんな風に余裕を見せもって徹底的に痛め付けやがる。そうすると、おれんとこのデケゾコナイはつつかれる度に嘴を地面に突っ込んでケッ、ケッと悲鳴をあげるばっかしや。もちろん、まだ傷が治ってもいないトサカをまたつつかれるのやさかい、赤い血ぃがぽたぽた落ちよる。
これを黙って見下ろしていたら、おれのどたまが割られて血ぃが流れたみたいに腹が立ってたまらん。すぐさま背負子のつっかい棒を振り上げてチョムスニとこのニワトリを殴りつけたろかと思うたが、考え直して、殴りつける真似をするだけで止めといた。
　今度もチョムスニが喧嘩をけしかけたんやろ。おれを怒らすためにやったのは間違いないことや。
あのスベタが近頃になって、おれのことが気に食わんちゅうて突っ掛かってきよるが、さっぱり訳がわからん。
　四日前のジャガイモのことかて、おれにはあいつに間違うたことをした覚えはまったくない。女やったら山菜採りにでも行たらええのに、ひとが垣根を組む仕事の邪魔をするとは何事やねん。それも足音を忍ばせて背後からそっと近づいて、
「なあ、一人でやってんの？」
と、しょぉもないおしゃべりをしやがんねん。
　つい昨日までは、あいつとおれは話をしたこともないし、顔を合わせても知らんぷりして、間違いを起こさんようにしてきたのに、今になっていきなり馴れ馴れしくするとは何事や。ましてや子馬みたいに大きな娘が他人の家の仕事している男に向こうて……。
「そうや、一人でやってんねん、大勢でなんかするもんか」
おれが吐き捨てるように言うたら、
「あんた仕事するの好き？」
とか、
「真夏になってからやったらええやんけ、今ごろ垣根を組むやなんて」
しょぉもないことを言うてから、他人に聞かれたらまずいと思うたのか、手ぇで口をふさいできゃっきゃっと笑い転げやがる。べつにおかしくもないのに、陽気のせいでこの女は狂うたんちゃうかと心配になった。それだけやない、しばらくしてから自分の家の方をちらちら振り返って見ているなあと思うたら、前掛けの下に突っ込んでた右手を出して、おれの顎の先ににゅう

っと突き出しよった。いつ焼いたものか、ぬくい湯気がふわふわ立つ大きなジャガイモを三個も手ぇにいっぱい握っていよる。
「あんたの家にはないやろ？」
と、恩着せがましく大口をたたいてから、他人に見られたら大変な事になるよってに、ここで早よう食うてしまえとぬかしよる。それから、また言うことには、
「春のジャガイモはおいしいんやで」
「おれはジャガイモなんか食わへん。おまえが食え」
　おれは振り向きもせんと、仕事をしていた手ぇで肩越しにぐいと押し返したった。それでも帰ろうとせえへん。それどころか、フーハーとけったいな息づかいが徐々に荒ろうなってくる。これはいったい何事やと思うて、そのとき初めて振り向いて見て、おれはほんまに吃驚仰天した。おれらがこの村にやって来てからかれこれ三年になるが、今まで、チョムスニの浅黒い顔がこんなに赤大根みたいに真っ赤になったためしはない。それに、目ぇを三角にしてしばらくおれをこう睨みつけていたが、そのうち涙まで滲んできよるやないけ。それから籠を引っつかむがはやいか、唇を噛み絞めて、倒けそうになったり、転びそうになったりしぃもって、畔道の方へあたふたと逃げて行きよった。
　たまに村の大人が、
「そろそろ嫁に行かへんか？」
と言うて、からこうたら、
「いらん心配せんといて。ときが来たらさっさと行きますわ！」
こんな風にさらっと受け流すチョムスニやった。元々から恥ずかしがり屋の娘ではないし、悔しいゆうて涙を見せるような間抜けでもない。悔しかったら、むしろおれの背中を籠で一発どやしつけてから逃げるような女や。
　ところでや、あんな不細工なかっこうで逃げてからとゆうもの、おれを見つけたら取って食おうと躍起になってやがる。
　仮にや、やるゆうたジャガイモを食わへんのが無礼やちゅうなら、黙ってくれたらええねん、〈あんたの家にはないやろ〉とは何事や。それでのうても、あっちは小作地管理人で、こっちは小作権を譲ってもろうて田畑を耕してる立場上、いつもぺこぺこしてんねん。おれらが初めてこの村に来て家がのうて困ってたとき、地所を貸してくれて、そこに家を建てるように用意してくれたのもチョムスニとこの好意やった。それから、おれのおかんや親父も農繁期に食料が不足すると、せっせとチョムスニとこへ出入りして借ってきては食べもって、あんなに人柄のええとこはどこにもあらへんでと、せえだい褒めちぎってんねん。それでも、十七にもなった男女がこそこそ話をしたり、くっ付いて歩いたりして、村で悪いうわさが立ったらかなんで、と注意してくれたのもおかんやった。どうしてかと言うと、おれがチョムスニと問題を引き起こしたら、チョムスニの親が怒るやろうし、そうなったら、うちは田畑も取り上げられるし、家も追い出されないではすまへんからやった。
　ところで、あの女が訳もなしにいきり立って、おれをいびり倒そうとするやないけ。
　涙を流して逃げた次の日の夕方やった。薪をいっぱい背負うて山から下りて来ると、どこか

らか、ニワトリの絞め殺されているような鳴き声が聞こえる。どこの家でニワトリをつぶしてんのかと思いもって、チョムスニとこの垣根の裏へ回って来て、おれは思わず目がまん丸になった。チョムスニが一人で自分の家の土間に腰を下ろしていよったが、こいつがチマ〔裳〕の前におれんとこのメンドリをしっかり押さえ付けておいて、
「このニワトリめ！死ね、死ね」
　凄まじい形相で殴りつけてるやないけ。それも、頭でもどやすんならまだしも、卵も産めんように尻のあたりを拳骨でごつごつと小突きよる。
　おれは頭に血ぃがのぼって手足がぶるぶる震えたが、念のため周囲をぐるっと見回わして、チョムスニの家に誰もいないのを確かめといた。よし今だっ、と背負子のつっかい棒を振り上げて垣根の真ん中へんに叩きつけて、
「このスベタ！おれんとこのメンドリを卵が産めんようにする気ぃか？」
と、大声を張り上げた。
　ところがや、チョムスニはまるで驚いた素振りも見せんと、いけしゃあしゃあと座ったままで、自分のニワトリみたいに、また、死ね、死ねと殴りつけるやないけ。これを見たら、おれが山から下りて来る頃合いを見計って、あらかじめニワトリを捕まえておいて、これ見よがしに、おれの目の前で殴りつけているのに違いない。
　しかしや、そうは言うても、おれは他人の家に飛び込んで行て、そこの娘と争うようなことはでけへん立場やさかいに、形勢はまったく不利やと思うた。せやから、ニワトリが殴られる度につっかい棒で垣根を叩くしか手立てがなかったんや。なんでや言うたら、垣根を叩いたら叩くほど垣根に取り付けた柴が外れて骨組だけになるからや。しかしや、なんぼ考えてみても、どっちみちおれだけが損をする巡り合わせや。
「おいっ、このスベタ！おれのニワトリを殺してしまう気ぃか？」
　おれが目ぇをむいて、もいっぺん大声で怒鳴りつけたら、やっと垣根の方へちょこちょこ寄って来よったが、垣根の外に立ってるおれの頭を目掛けてニワトリを投げつけやがる。
「うあー、バッチイ！バッチイ！」
「バッチイもんを今まで抱いとれ言うたか？ゲス女め」
と、おれも汚らしそうに垣根の側からさっと飛びのきながらも、どうにも腹が立ってたまらんかった。というのは、メンドリが驚いて羽ばたきした弾みに、おれのでデボチンに水っぽいフンをびちゃっと引っ掛けやがったんやが、それを見たら、どうも子袋だけが裂けたんやのうて、身体全体がいかれてしもたらしかったからや。それにや、おれの背後から、おれにだけ聞こえるか聞こえないかの小声で、
「このアホンダラ！」
「やーい、生まれつきのアホかえ？」
　これぐらいなら、まだええほうやねんけど、
「やーい！おまえの父ちゃんフニャチンやて？」
「なんやて？おれの親父がフニャチンやと？」
と言い返すつもりで、怒って振り向いて見たら、垣根の上に出ているはずのチョムスニの頭が、

どこへ隠れたのか見えへん。それで、引き上げようとしたら、またさっきとおんなじ悪口を垣根越しに浴びせ掛けるやないけ。こんなに悪口を言われても、一言も言い返せないのかと思うと、石ころにけつまずいて爪先が裂けて血ぃが出たのも気づかないほど悔しうて、とうとう涙までどっと溢れてきよった。

しかしや、チョムスニの嫌がらせはそれだけやない。

誰もいない間に、自分とこのオンドリをけしかけて、おれんとこのオンドリと喧嘩させるんや。自分とこのオンドリはいかにも強そうで、喧嘩ゆうたら奮い立っていつも勝つと分かってるからや。せやから、おれんとこのオンドリはしょっちゅう鶏冠や目ぇを血ぃまみれにされてしまうねん。おれんとこのオンドリが出て来なかったら、あのスベタがわざわざ餌でおびき出して喧嘩をさせるんや。

こうなったら、おれとしても何とか作戦を練らんことには収まりがつかへん。ある日のこと、おれんとこのオンドリを捕まえて、こっそりミソ甕の所へつれ込んだ。闘鶏に唐辛子ミソを食わしたら、病気の牛がマムシ食うて元気になるように、力が出るそうや。ミソ甕から唐辛子ミソを一皿すくうて、ニワトリのくちばしの先から押し込んで食わせてみた。ニワトリも唐辛子ミソが気に入ったんかしらんが、嫌がりもせずに皿に半分ほど食いよった。食うてからすぐに力が出るわけはないよって、気力が充実するまでしばらく鶏小屋の中に入れておいた。

畑に堆肥を二荷〔か〕ほど運んでから一服する間に、そのニワトリを抱えて外に出た。ええ具合に外には誰もいてへん。チョムスニが一人で自分とこの垣根の中で古い着物をほどいているのか、綿を打っているのか、しゃがんで何やらしているだけやった。

おれはチョムスニとこのオンドリが遊んでいる畑へ行って、抱えていたニワトリを下ろしておいて、そうっとようすをうかごうた。二羽のニワトリはいつものように喧嘩を始めよったが、最初のうちはなんの効き目もあらへん。見事につつかれた拍子に、おれんとこのニワトリはまた血ぃを流して、羽をバタバタさせては飛び上がり、飛び上がりするだけで、いっぺんもつつき返すことができへん。

ところがどういう風の吹き回しか、いっぺん力を振り絞ってパッと飛び上がるがはやいか、爪で敵の目を引っ掻き、鶏冠をつつきよった。これにはおっきいオンドリもたじたじとなって退いた。おれんとこのちっこいオンドリが嵩にかかって攻め立てて、もういっぺん鶏冠をつつくと、今度こそ頑丈な頭からも血ぃが流れないではすまなかった。その調子や、わかったぞ。唐辛子ミソを食わせたらええねんな、おれは心から晴れやかな気分になった。意外なことに、おれがニワトリに喧嘩をけしかけたので、驚いて垣根の内から見ていたチョムスニも、このときはよほど癪に障ったのか眉をしかめよった。

おれは両手で尻を叩きもって、ひっきりなしに、

「ようやった！ようやった！」

と、天にも昇る心地になった。

ところがや、それからなんぼもたたへんうちに、おれは魂が抜けて棒立ちになってしもうた。なんでや言うたら、おっきいオンドリがいっぺんつつかれた仕返しに、猛然と突き返した勢いで、おれんとこのオンドリは縮み上がって、やられっぱなしや。これを見て、今度はチョムスニが

ケラケラと聞こえよがしに笑うやんけ。
　おれは見るに見兼ねて飛びかかると、おれんとこのオンドリを抱えて家に連れ帰った。唐辛子ミソをもうちょっと食わせといたら良かったのに、あんまり急いて喧嘩させたのが悔やまれる。ミソ甕のある方へ戻って、もういっぺん嘴の先に唐辛子ミソを押し付けた。興奮しているせいか、ちっとも食いよらん。
仕方がないので、ニワトリを仰向けに寝かせて、その口に紙巻きタバコの吸い口をくわえさせた。それから、唐辛子ミソを水で薄めて、吸い口の穴からちょっとずつ流し込んだ。ニワトリは苦しそうにクックッとくしゃみをしているようやったが、この場の苦しみなんか、毎日のように血を流すのとは比べ物にならへんと思うた。
　ところが、小さい器で唐辛子ミソの汁を二杯ほど飲ませてから、おれはシヨゲテしもうた。ぴんぴんしていたニワトリが、どういうわけか首をぐにゃっとねじって、おれの手の中でくたばってしもうたやないけ。親父に見つかったらえらいことになるので、素早く鶏小屋に隠しておいたところ、今日の朝方になってやっと息を吹き返したらしい。
　そのオンドリを、こうして帰りしなに見てみたら、また喧嘩をさせてるやんけ。きっとこのスベタがおれんとこに人がいない隙に入り込んで、鶏小屋から連れ出したのに違いない。おれはまたニワトリを鶏小屋に入れておいて、気にはなるが、そうはゆうても山へ薪を取りに行かんわけにはいかん。
　松の枯れ枝を取りもって、よくよく考えてみたが、どうしてもあのスベタの首根っこをひねってやりたい。今度山から下りたら、あいつの背中をいっぱつ殴り付けたろうと、そこそこに薪を背負うと一目散に下りて来た。
　ほとんど家の近くまで下りて来たところで、草笛の音を聞いてぴたっと足が止まった。山の麓に散らばっている大きい岩の間に、黄色い冬柏の花がこんもりと咲き誇っていた。その間に座って、チョムスニが寂しそうに草笛を吹いているやないけ。それよりもっとたまげたのは、その前でまたバタバタと聞こえるニワトリの羽の音や。きっとこいつがおれを怒らせようと思うて、ニワトリを摘み出してきて、おれが山から下りて来る道の角で喧嘩をさせて、自分はその前に座っていけしゃあしゃあと草笛を吹いているのに違いない。
　おれはめちゃくちゃ腹が立って、両目から火ぃが出るのといっしょにと涙がどっと溢た。背負子を下ろす間もなくそのまま投げ捨てて、背負子のつっかい棒を振り上げると脇目も振らずに走り寄った。
　近づいてみると、やっぱりおれの予想どおり、おれんとこのオンドリが血ぃを流して、ほとんど瀕死の状態や。ニワトリもニワトリやが、それを見ていながら瞬きひとつしないで、平然と座ったまま草笛を吹いている図太さに身震いした。村でも評判になっているし、おれも一時は、活発でよう働くかわいい女の子やと思うていたが、いま見たらその目ぇはまるで狐みたいや。
　おれはいきなり躍りかかって、無我夢中でおっきいオンドリを一撃のもとに殴り倒した。ニワトリはバタッと倒れたまま、足ひとつぴくりともせずに死んでしまった。
それから、おれはぼけっとして突っ立っていたが、チョムスニが恐ろしい形相で突っ掛かって来た弾みに仰向けにころっと倒れた。

「ちょっとあんた！！なんで他人のニワトリを殺すのん？」
「それがどないしたんや？」
と、起き上がったら、
「なんやて！どこのニワトリや思てんねん」
と、胸板を押されてまた仰向けにころっと倒れてしもうた。そのままで、よくよく考えてみたら、悔しくもあり恥ずかしくもあり、それに、こんな騒ぎを引き起こしてしもうたからには、もう田畑も取り上げられるし、家も追い出されるかも知れん。
　おれはよろよろと立ち上がって袖で目ぇを覆うた。その途端にワーンと泣き出してしもうた。ところが、チョムスニが近くに寄って来て、
「ほたら、もうあんなことせえへんか？」
と尋んねたので、やっと生き返った気分になった。おれは先ず涙を拭いて、何をもうせえへんのか、訳も分からんまま、
「うん！」
と、ええ加減に返事した。
「今度またあんなことをしたら、うんといけずしたるよって」
「うん、うん、もうせえへん」
「ニワトリが死んだことは気にせんでもええわ。言いつけたりせえへんから」
　それから、何に衝き動かされたのか、おれの肩に手をかけたままバタッと倒れ込んだ。その弾みにおれの身体も重なって倒れ込み、いまを盛りと咲き誇っている黄色い冬柏の花の中へすっぽり埋もれてしまった。
　刺激的でかぐわしい匂いに、おれは地面が落ち込むような感じがして、それきり気が遠うなってしもうた。
「誰にも言うたらあかんし！」
「うん！」
　しばらくしてから、下の方で、
「チョムスニやあ！チョムスニやあ！ほんに、あの子は針仕事をほったらかして、どこへ行きさらしたんやろ？
と、外出先から帰って来たらしいチョムスニの母親が怒鳴り散らしている。
　チョムスニは震え上がって、花の下をこそこそ這って山を下りて行った。そのあと、おれも岩の陰を伝うてのそのそ這いながら山の上へ逃げ出すしかなかった。
（1936年）

ツバキの花

http://p.booklog.jp/book/37357

著者 : koyasatobito
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/koyasatobito/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/37357

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/37357

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.